

## 対談

## 学問の自由と歴史認識問題をめぐって — 植村裁判を中心に

日 時：2021年6月25日、於麗澤大学東京研究センター

対談者：西岡 力(本研究会会長、麗澤大学特任教授)  
前川恵司(亜細亜大学アジア研究所特別研究員、  
元朝日新聞ソウル特派員[1992年4月から94年10月])

西岡： 私から口火を切らせて頂きますけれども、朝日新聞元記者の植村隆氏が私と櫻井よしこ氏を相手に訴えていた慰安婦報道をめぐる裁判で、完全に彼が敗訴しました。特に私の裁判では、彼が書いた記事(1991年8月11日と12月25日)について私は「捏造だ」と主張したのですが、その私の論評は真実であると判決で書かれました。つまり、朝日新聞の記事は捏造であったということを、裁判所が認めるという結果になりました。前川さんは朝日にいらっしやいながら、朝日の慰安婦報道は問題だという発言をして下さっています。一連の裁判結果を見て、どのように思われましたか？

前川： こう言うては何ですが、私は西岡先生の裁判は最初から興味がなかったんです。植村氏が勝てるわけではない、と初めから思っていたからです。裁判所は常識的な判断を下すだろうと考えていました。植村氏のあの記事は、記事以前の問題です。取材のやり方からしても、誰が喋ったか分からないテープを聞いて、それをそのまま書いてしまった。その女性の方(金学順さん)のお名前も知らなかったと思います。そんな記事が世間の常識で通用するはずがないし、裁判所もそのように判断すると思っていたので、今回の結果は予想された通りと言えます。先生方は法廷に提出する書面を作成しなければならなかったでしょうし、本当に迷惑な裁判だったと思います。一審判決は裁判所が植村氏に、「あなたは常識的な取材をした記事を書きなさいよ」と言ったようなものです。朝日新聞としては、裁判の結果をしっかりと受け止めなければならないのに、私には反省しているように見えません。

西岡： 私は怒っているのですが、最高裁の判決が2021年3月に出たのですが、朝日新聞は小さな記事ではありましたが、「地裁では西岡の真実性が認められたが、高裁では西岡の主張にも問題が指摘されて真実相当性が認められた」という捏造記事を書きました。これは嘘です。高裁でも真実性が認められましたし、最高裁でも認められました。判決の内容に納得がいけないという感想ならば良いのですが、真実性が認められたのか、真実相当性が認められたのかという明確なファクトがあるのですから、そこに嘘を書いてはならない。本来なら朝日新聞は、自社の新聞で出した記事が捏造であるという裁判所の判断を紙面で大きく報じた上で、それ

に納得するなら社として訂正謝罪すべきだし、納得できないなら不当判決だと書いて、その理由を紙面に載せるべきところなのに、真実相当性しか認められず、真実性は認められなかったという嘘を書いたのです。朝日新聞の読者にだけは、自社の記事が裁判所で捏造だと認められたことを伝えたくなかったのでしょうか。朝日新聞はファクトを書かなくても良いという体質があるのでしょうか？

前川： 兎に角、何かケチをつけてやれという感じですね。裁判は植村氏が訴えたのであって、朝日新聞が訴えたわけではない。ですが、裁判所が言及しているのは朝日新聞記者が書いて朝日新聞に載った記事なので、朝日新聞はそれなりの見解を出すべきでしょう。私が知る限りでは出していません。

西岡： 私は知人から、抗議した方が良いと助言を受けたので、朝日新聞の社長と編集長宛に、記事の訂正を求める手紙を出したのですが、未だに返事がありません。

前川： 西岡先生の当初のご指摘を朝日新聞が聞いていれば、このような問題にならなかったでしょう。植村氏是对応しようとしたが、社内で止められたそうですが。

西岡： そうです。私は植村氏の91年の8月と12月の記事は問題であると、『文藝春秋』92年4月号で主張しました。その後ずっと反論がありませんでした。ところが、朝日新聞が2014年に慰安婦報道の検証をして大騒ぎになり、植村氏の所にも抗議が殺到して、『文藝春秋』2015年1月号で彼は初めて反論を書きました。その中で植村氏は、92年当時西岡に反論しようとしたが、上司から止められたと言っています。

しかし、私は当時朝日の内部に通じる人から聞いたのですが、朝日内部でも利害関係者に記事を書かせたことは問題である、という声が出ていたらしい。植村氏の妻は、日本政府を相手に裁判を起こした遺族会の幹部の娘ですから。実際、植村氏をテヘラン特派員にして、事実上もう朝鮮問題には触れさせない措置をした。私も彼にも人生があるし、武士の情けで名指しの批判は自粛しましたが、1997年に「新しい教科書をつくる会」が発足し、安倍さんたちが「日本の前途と歴史教育を考える若手議員の会」をつくり、慰安婦の強制連行の有無が論争になりました。その頃に朝日は植村氏をソウル特派員にしたのです。当時の外報部長が清田治史氏でした。私はまた彼に日韓関係の記事を書かせるのかと憤り、再び植村氏の名前を出した批判を始めました。私は92年頃は植村氏の記事を「誤報」と言っていました。この時から「捏造」と言い始め、批判を強めました。

前川： 清田氏や植村氏たちは、大阪社会部出身を核にした朝鮮問題担当グループ、つまり一つの「村」の人たちと見れば分かりやすいでしょう。伝統や価値観を守るための役割を果たす「村」もあれば、一蓮托生の利害関係で結びつき、勢力を誇示する「村」もあります。元々はソウルのポストは西部本社が握っていて、特派員を出していました。80年代からの朝鮮問題への関心の高まりの中で、大阪社会部出身と政治部がつながって、ソウル支局の人事に影響力を及ぼすような勢力が形成されていったように私は考えています。大阪社会部も一体ではなく、大阪社会部出身者の中も「村」で分かれているようですが、朝日新聞慰安婦報道問題を考える時、運命共同体の如き「村」があったことは、無視できないと思います。

西岡： 91年に植村氏たち大阪社会部が中心になった「女たちの太平洋戦争」を始めた。そのリーダーは北畠清泰氏です。彼が後に東京本社の論説員になり、吉田清治氏

を持ち上げるコラムを書くのですが、北島氏と植村氏は同じ派閥なのですか？

前川： あの時は大阪読売が「戦争展」(1982年開始)という企画を毎年8月15日を中心にしていたのですが、それが大変人気があり、菊池寛賞を取りました。大阪朝日としては、対抗する企画として「女たちの太平洋戦争」を始めたと思います。ですので、慰安婦報道は一種の対大阪読売キャンペーンという面があったと言えると思います。「女たちの太平洋戦争」が92年に日本ジャーナリスト会議賞を受賞したのですから、大喜びでした。

大阪朝日は同和問題や在日、原爆、夏の甲子園が大きな柱ですから、これらに絡むことが、記者として大阪朝日での一種のステータスになるわけです。

西岡： 私は色々なところで書いているのですが、北島氏は「女たちの太平洋戦争」の最終回に、日本のどこかに戦時中のレイプや暴行を懐かしんでいる人間がいるはずで、それを暴露することが自分たちの使命であるということを書いています。戦前の日本や日本軍に対する事実に基づかない悪意、すなわち反日の塊のような人物であると思いました。

前川： それが大阪朝日の一種のセンセーショナルリズムといえるでしょう。植村氏の記事には、太平洋戦争下で女子挺身隊として戦場に連行されたというフレーズがありますが、やはり大阪社会部出身の小田川興氏も、記事で同じフレーズを書いています。私には、刺激的に表現することで記事の段数を稼ごうとしているとしか見えません。

全国の地方紙はどこも地元で絡むニュースを中心にしますが、大阪は土地柄もあってセンセーショナルリズムが強いです。森友学園の件でも、総理の夫人を呼んでナンボだと、世間に派手に騒いで客を集めるというのが大阪流と言えます。同じ土壌の延長のセンセーショナルリズムです。

西岡： 読売への対抗とセンセーショナルリズムという、大阪社会部ならではの背景説明がありました。もう少し大きく見ると、91年は歴史認識問題の大きな区切りではないか、と私は考えています。つまりソ連の崩壊です。歴史が進歩して、いつか共産党の天下になると考えていた人たちが朝日新聞の中にもいたのですが、冷戦の結果、ソ連や東欧など共産圏が崩壊してショックを受けた。朝日新聞の文革報道は滅茶苦茶でした。本来ならそのときにそれを検証するべきだったのに、検証せずに慰安婦報道に走った。過去の日本を叩くという進路を取った。そこから歴史認識問題が大きく動いていき、中国共産党も北朝鮮の労働党も社会主義の優位性を主張できなくなったので民族問題、すなわち反日を自分たちの正当性に利用し始めた。

日本では、過去の日本の罪を暴くことで、共産主義を信奉していた日本人たちが戦後路線を間違えたことを隠そうとした。進歩派が良心派に化けたと私は表現しているのですが、そういった日本の勢力と、中国・北朝鮮とそれに従う韓国の勢力が噛み合ってしまう、歴史認識問題が拡大していったのではないかと思います。まさに91年の「女たちの太平洋戦争」における吉田清治氏の持ち上げ方は、大きく見るとそのようなことが言えると思うのですが、如何ですか？

前川： 左翼の人たちは、冷戦終結で運動の目標が希薄化する中で、朝鮮にからむ過去

の問題に目をつけると、朝日の中の進歩派、良心派をきどっていた一部が運動と一体化していったのではないのでしょうか。私は左派週刊誌で捏造記者と書かれましたが、大阪社会部の柳博氏は私と話したときに、植村氏の妻の母が運動体のリーダーであるを知っていたら原稿を使わなかったと答えたので、そこを記事にしたら捏造記者と批判されました。

西岡： しかし、大阪社会部のデスク出身の柳博雄氏は、間違いなくそう言ったのですよね？ それを考えると、柳氏もジャーナリストではなく、事実よりも政治的立場を優先させていると言わざるを得ませんね。

前川： 自分が進歩的で良心的な記者であると、私の記事を否定することでアピールしようとしたのではないですか。大阪社会部の中の立場を考えたのでは、という人もいます。自分は進歩派だ、良心派だと位置づける人が大阪に限らず、朝日には多いというのが実感ですが、進歩派や良心派であることと、記事が正しいかどうかは別のことです。

植村氏の弁護団に高木健一氏が入っていないのは、意味深ではないですか。高木氏は朝日と慰安婦裁判の関係を全部知っているからかもしれないし、あるいはすでにウンザリしたからかもしれない。商業新聞の記者でありながら、高木氏のような左派陣営の人たちをうまく利用して社内で偉くなったり漁夫の利を得たりしようとするようなことをしていたとしたら、左派の政治的集団と一体となった報道ではないか、と批判されるのは仕方ないでしょう。

西岡： 事実として、彼らは出世できたわけですよ。北畠氏も東京の論説委員になりました。

前川： 出世するなかで自分の「村」の記者をソウルに出しやすくなり、影響力も増すということです。

西岡： 主筆だった若宮啓文氏は、大阪社会部出身ではないですね。彼と清田氏は違うのですか？

前川： 若宮氏は東京政治部です。あの二人は一緒に語学留学に行きました。大阪社会部と東京政治部が、ソウルに「勢力拡大」を図っていったことの現れだったかもしれませんね。

西岡： 朝日は97年に一度、慰安婦報道の検証をしましたが、吉田清治証言については最終的に検証できなかったと言って、自分たちの誤りを認めませんでした。しかし、2014年のあのタイミングで、また検証したのは何故でしょうか？

前川： 発行部数が減ってきて、仕方なくでしょう。

西岡： 雑誌やネットの朝日新聞の批判が影響を与えた、ということですか？

前川： あの時は部数がどんどん減っていると聞きました。植村氏の記事が出た後に、ソウルで戦時中を知っている人々に聞き回ったのですが、日本軍が朝鮮人女性を強制連行していたなどはあり得ないと、一様に話していました。そのようなことをすれば暴動が起こっている、と言っていました。私も植村氏らの書いた話はありません、と考えていました。

そのことは、私の後任の特派員に伝えましたが、彼が検証時のリーダーになったと聞いて、慰安婦報道を検証するのならなぜ私に改めて聞きに来ないのか、不思議

議に思いました。吉田証言や植村氏の記事に疑問を持っていた声が、すでに社内から出ていたことが明らかになれば当然、「なぜ速やかに改めなかったのか」となるので、そうなるのを避けるために、私のところに聞きに来なかったのだと思います。

いまでも韓国では、(戦時下には人々が)女子挺身隊と慰安婦を混同していたという主張がありますが、それは嘘ではないかと思えます。工場に働きに行くのと身売りでは、話が全く違います。

西岡：「黎明の瞳」という75年から韓国のスポーツ紙に長期連載された小説が、91年にテレビドラマになって大人気を集めた。主人公の独立運動家の娘が強制連行され、慰安婦にさせられたというストーリーになっていました。それで日本統治時代を知らない世代が、強制連行を信じてしまった。

前川：韓国のテレビドラマを見ると、慰安婦を都合よく使っています。独立運動をした男の娘が、無理やり慰安婦にされたというフィクションがたくさんあります。若い人たちは、それを信じてしまっている。

西岡：日本政府も謝罪するし、朝日新聞やNHKも報道するから、よけい信じてしまう。

前川：朝日新聞は、慰安所に軍が関与していたという文書を強制連行の証拠のように報道しましたが、軍隊専用の慰安所ですから、性病防止やスパイ対策からしても軍が関わっているのが当然で、軍が関わっていたからといって、強制と直結するわけではない。それで宮沢総理を謝らせた、当時の外務省もひどいです。

西岡：私も1970年代後半、韓国に留学中は昔を懐かしんでいる人はいても、強制連行のことを言う人はいませんでした。吉田清治氏の強制連行証言は、まさかウソだとは思わなかったもので、そのときの済州島だけが特殊だったのかと最初は思っていました。常識的に考えれば、強制連行をしていない人物が「強制連行をした」と言うのだろうか。編集者もいる出版社から出ている書物が、全くの嘘だということはありえるのか。

92年に最初の朝日批判の論文を書いたとき、戦時中にソウルで暮らしていた森田芳夫氏へ電話して、吉田氏の証言のことを質問すると、森田氏は常識的にありえないが、嘘をついてまで強制連行を主張するのは考えにくいから、調べる必要があると仰っていました。

結局、朝日新聞は1982年に最初に吉田氏の慰安婦奴隷狩り証言を紹介して、翌年吉田は済州島で慰安婦奴隷狩りをしたという問題の本(『私の戦争犯罪—朝鮮人強制連行』三一書房)を出した。しかし、朝日はその後、吉田を大きく取り上げなかった。約10年後、91年の「女たちの太平洋戦争」で2回紹介して、北島氏が再び吉田氏を持ち上げました。

外務省の責任は、事実関係の調査を怠ったことにあります。元慰安婦金学順氏の証言が最初に報じられた頃、白木敬子氏が月刊『宝石』で、金学順氏は当時貧乏で親に売られてキーセン学校に行って、慰安所に連れられて行ったと書いているのです。これを読んだときは衝撃を受けまして、強制連行など嘘だと気が付きました。吉田氏の話した強制連行は証明されていなかった。

文藝春秋から依頼があり、論文を書くために取材を進め、私は1992年に外務省の担当者とお話する機会を得ました。私は、宮沢総理は韓国で謝罪したが何に対

して謝ったのか。貧困の結果、売春をせざるを得なかった女性たちに謝ったのか。権力によって強制連行されて慰安婦になった女性に謝ったのか。もしも前者であれば、吉原で働いていた日本人女性たちに謝らないのは何故か、と。そうしたら「これから調べる」と言われました。

朝日新聞の捏造が半分以上原因ですが、新聞記事に対して外務省が調査して今後の対応を考えるべきだったにもかかわらず、先に総理に8回も謝罪させたことは問題です。これが日韓関係に禍根を残してしまいました。外務省の中には、日韓問題は韓国がゴールポストを動かしていると言う人がいますが、私は「日本がゴールポストを韓国側の方へ持っていった」と考えています。

現在、朝日新聞の嘘は証明できましたが、外務省は慰安婦の強制連行という嘘が国際社会に広まってしまった理由は、吉田清治氏による嘘の証言と、それを朝日新聞が広めたからであると説明しています。これは朝日新聞に責任を押し付けて、自分たちの責任は認めないという姿勢です。

前川： 外務省も吉田氏の証言に関しては、秦郁彦氏の済州島調査の際に協力しました。したがって、外務省も済州島調査の報告を現地から受けている。その時にリアクションを多くとるべきだったのですが、結局何もしなかった。朝日新聞は97年と2014年に慰安婦報道に関する検証をしましたが、真摯な調査とはいえないと思う。読者もそう感じたことでしょう。

西岡： 前川さんが吉田清治氏と最初に会ったときは、慰安婦ではなくて徴用工の強制連行の話聞かされたのでしたよね？

前川： 吉田氏には、彼の売り込みで会いました。私も『朝鮮人強制連行の記録』（朴慶植、1965年）は読んでおり、総連系の強制連行調査団の福島・会津での現地調査取材しました。同胞の中に強制連行された労務者がいた、と在日朝鮮人の老人が「実態」を涙ながらに訴えていました。なぜ実際に強制連行された人が出てこないのかとの疑問はありましたが、強制連行はあったのだろうと、当時私は当然視していました。まさか強制連行をしていない人が「強制連行の主犯です」と言うとは思われないし、実際に吉田氏の話にはリアリティがありました。場所は女狩りをしたという済州島ではなかったですが、朝鮮の田舎の独特な埃っぽい感じとか、村の様相がリアルだったのです。それで私は、吉田氏の話信用しました。彼は修学旅行で朝鮮に行ったことがあったと、後に聞きました。朝鮮の風土を知っていたから上手くフィクションを作りだしたのだと思います。

西岡： 吉田氏が山口県で動員関係の仕事をしていたことは事実です。ですので、彼の一冊目の書籍（『朝鮮人慰安婦と日本人一元下関労報動員部長の手記』新人物往来社 1977年）は朝鮮半島のことは触れておらず、日本国内にいた朝鮮人女性たちを慰安婦にしたという内容になっています。

前川： 私が吉田氏に疑問を持ったのは、徴用工（男性）の強制連行から、いつの間にか女性の強制連行になったときです。女性の話などなかったのに、いきなり女狩りの主として登場してきた。私は吉田氏の証言はおかしいと気づきました。朝日社内でも疑問の声があっても、朝鮮報道、慰安婦報道を自分たちの勢力拡大のタネにしようとしていた人たちにはどうでもよかった。

西岡： 問題となった植村氏の91年8月の記事は、東京版では「女子挺身隊の名で戦場に連行された」という文章が削除されています。大阪本社が東京本社と同じような判断を下していれば、女性の強制連行という慰安婦問題は起こらなかったはずですよ。

前川： 同じ朝日新聞でも、東京と大阪は同一ではありません。東京社会部で慰安婦問題をやっていた松井やより氏と大阪の植村氏とは別々と考えた方がいいでしょう。松井氏と植村氏が共同で一本の原稿を書いたという話を、私は聞いたことがありません。2000年の女性国際戦犯法廷は松井氏たちがやっていて、植村氏は絡んでいなかったと思います。これも朝日新聞内部の実情を表しているのではないですか。

慰安婦報道では植村氏記事だけに留まらず、折々に上層部の幹部の意向などが、村、の栄枯盛衰、社内規律に影響を与えていたことが特徴だと思います。朝日新聞内部では、村、つまり派閥のような特定のグループの住人となり、身を任せないと上手くいかないという組織的歪みが、一連の慰安婦報道から検証作業にまで悪影響を与えたのではないのでしょうか。そうした面を含めて、企業としての朝日新聞の汚点としては、慰安婦報道問題が戦後最大と言えると私は思います。

西岡： 私たちは朝日新聞の独立検証委員会をつくり、慰安婦報道を検証して2015年に出した報告書で、朝日の慰安婦報道を「92年1月強制連行プロパガンダ」と名付けました。このプロパガンダという表現は、前川さんから見ても適切な表現でしょうか？

前川： 結局は左翼運動家のプロパガンダ路線に沿った報道、という点ではそうだと思います。商業新聞として朝日が左の立場で新聞を売るのも、産経が右の立場になるのも自由……それが自由民主主義国の言論の姿です。選択するのは読者ですから。その結果、朝日の部数が落ちているのですが、右でも左でも事実を重視しない新聞はプロパガンダ新聞です。左派の政治勢力はプロパガンダ（宣伝扇動）やデマゴギーが戦略的常套手段です。慰安婦報道で朝日がそれに嵌ってしまったかどうかは、検証すべきことのひとつです。

大阪は韓国系左派民主化運動団体である在日韓国青年同盟（韓青同）が強く、そうした背景で大阪社会部の担当者が韓青同と繋がっていたと聞いたことがあります。大阪社会部出身者はむきになって否定しましたが、私は吉田清治の「女狩り」虚言が大阪で報じられ、しかもいつまでもノースルーだったのは、そうした繋がりがあったからではと感じます。

商業新聞の役目は、読者に事実をもとにした記事を届けることです。しかし、慰安婦など朝鮮半島の過去の問題の報道に、朝日内部の朝鮮報道グループの勢力争いがらみの思惑、功名心が重なった結果、事実を検証しない、冷静さを欠いた、プロパガンダまがいの記事が紙面に載る結果になった、と私は思っています。植村氏の記事に関して、テープを聞いただけで記事にしたと知った時、私は大変驚きました。常識的にはありえない。私たちの時代は、少年事件で原稿は「少年A」であっても、少年Aの氏名、年齢、住所などのすべての情報を原稿に付記しておき、原稿チェックの時に少年Aが実在の人物であることを裏付取材できるようにして初めて出稿できました。本来ならば植村氏の原稿は、そのままでは通用しません。大阪で出稿したから紙面化できたのか、分かりませんが。

- 西岡： つまり、ソウル支局と大阪本社がグルになって報道したということなのですね。
- 前川： 東京外報部は、清田氏ら大阪社会部出身者が相次いで部長になる時代がありました。ポスト争いなどのなかで、村社会の勢力争いに不利になることはできないからと、誤った記事を訂正できなかつたようにも私には思えます。
- 西岡： なるほど。朝日新聞と総括して言っていましたが、私たちは大阪本社と戦っていたのですね。
- 前川： 植村氏の慰安婦報道は個人の過失ではなく、どこの企業でもある組織の問題が引き起こした、と言えます。繰り返しになりますが、西岡先生の指摘を最初から真摯に受け止めていれば、裁判所が「捏造」と判断するような無残な結果にはならなかつたと思います。
- 西岡： 今回の新聞の値上げの時も、読者への告知で「ネット上にフェイクニュースが飛び交う今、新聞の役割は増していると考えています。事実を正確に報じるという報道機関の使命を肝に銘じ、新聞を広げるのを楽しみにお待ちいただけるよう、内容とサービスを一層充実させてまいります」と言っているのですが、朝日新聞がフェイクニュースを流している。私の裁判の結果を報じた記事が嘘の内容だったので、ファクトを完全に無視している。指摘されても反省しないという朝日の行動は、普通なら考えられない。
- 前川： 朝日新聞がまだ部数が多かつた時代、色々な考えを持った読者がいるのだから目配りをした記事を書かなければならないと、私は教えられました。一つの主張の人たちがいるけれども、それとは異なつた主張を持つ人たちも読者のなかにいるのだからと。慰安婦報道などは、異なる認識を持った読者への目配りが十分でなく、自分たちと同じ考え方を持っていない人は要らないと言わんばかりのような姿勢が招いた誤りではないでしょうか。凋落する新聞社というのは、こうなるのかと思ひましたね。
- 若い朝日記者は、朝日の検証記事や第三者委員会の報告を読んでも、慰安婦情報などの一連の誤りの核心が何であり、長く放置されていたのはなぜかを理解できないと思います。過去の失敗の経験と教訓をきちんと後輩に伝えなくてもいいというのなら、悲しいことですね。